

南社文学と「詩界革命」

著者	倉田 貞美
雑誌名	漢文學會々報
巻	16
ページ	11-17
発行年	1955-06-19
URL	http://doi.org/10.15068/00148119

美盛とに喩へた」とするに在る以上「形性」^{本无}となつてゐる方が佳であらう。抄本に「形性」^{本无}と書入レがあるのも、「形性」^{本无}を誤衍視せず、異同を記したものであらう。又(36)「曷漸曷否」^{戸曷及}(50)「衆斯」^{二字本无}(55)「據之打」^{本无}(65)「天下和平」^{或本无天下}(133)「獄訟也」^{本无}(139)「室家之道不足」^{二字本无}(39)「誰女誰無家」^{本无}なども、やはりそれ、此の抄本の祖本からかくなつてゐたものか。そしてそれは、六朝通俗本系の我国に流入して古伝されたものであらう。念仏寺本は、そのやうな古い一種型を固存し、

南社文学と「詩界革命」

序言

南社は、一九〇九年に柳詠子・陳去病・高天梅などが発起人となつて上海に創設した、清末民初における一つの文学団体であるが、文学上における共同の信条に基いて結成されたものではなく、革命思想を中心として結ばれた文学団体であつた。同人たちは文筆をもつて大いに革命思想を鼓吹したし、多くの者が直接革命運動に参加したのであるが、もとより同じく革命思想とは言つても、「清朝打倒」という当面の目標は一致していたが、必ずしも同じような思想ではなかつた。ともあれ、南社文学は革命家の文学とも言ひ得るものであり、民族的、革命的、浪漫的な特色を有し、辛亥革命時代の時代精神を最も如実に反映した文学であつたと言ひることができよう。

この南社の同人たちは、いわゆる「詩界革命」——梁啓超たちが提唱し、黄遵憲などが優れた作品によって具現した——に對して、いかなる立場をとつたか。「詩界革命」から陳独秀・胡適たちの「文学革

今日に帰属させてくれる特質と価値をそなへてゐる。

五

以上により、大念仏寺本毛伝残卷は、恐らく釈文一本系、特に六朝通俗本(詩正義に所謂俗本)系統を祖本とする古い型を伝存するものか、と推定せられ、随つて釈文正本・正義本等とは別系の伝本と考へられる。そこには、正義本・釈文正本系と異なる古い型の字句相が残見でき、それは亦詩義解釈に少なからず貢献するものがある。

倉田貞美

命」への途上において、詩歌革新の上になかなる寄与をなしたか。そうした点を明らかにしてみたいと思ふのである。

一

南社の同人は、発起人の陳去病・高天梅・柳詠子を始め、黄節・諸宗元・馬君武・王毓仁など、多くの者が、同時に国学保存会の会員であつた。殊に黄節・陳去病はその主要なメンバーとして、「国粹学报」上に多くの論説詩文を掲載したし、諸宗元・劉季平・高天梅・呉梅・胡機安・龐樹柏なども、その作品を発表している。したがつて、「国粹学报略例」(第一期)において示した、「発明国学、保存国粹為宗旨。」とか、「於泰西學術、其有新理精識、足以証明中学者、皆從闡發。」という主張を、一応共通的なものと考えても、必ずしも不当ではないであらう。

彼等がかくの如き態度を執るに至つた理由は、「南越の詩人」黄節が、「国於吾中国者、外族專制之國、而非吾民族之國也。学於吾中国

者、外族專制之學、而非吾民族之學也。」「不自主其國、而奴隸於人之國、謂之國奴。不自主其學、而奴隸於人之學、謂之學奴。」「日本遂奪泰西之席、而為吾師、則其繼尤慕日本。嗚呼、亡吾國學者、不在泰西而在日本乎。」(『國粹學報第一期』)
「學者植於萬有新奇論、既結舌而不敢言、其言者不出鋼鐵、即出於附會、鋼鐵固非、附會尤失。嗜新之士、復大倡功利之說、以為用即是在。循是而叫囂不已。吾恐不惟名節道德掃地而盡、即寸札短文、求之弱冠後生、將來亦有不能弁者。嗚呼、國學之亡、可立而待。」(『國粹學報第四期』)
などと、痛憤慨嘆しつつ論じているところによっても自ら明白である。

陳去病も「また攘夷の志を抱く」(『國粹學報第十三期』、劉)者であつたが、彼が「南社詩文詞選叙」(『南社第一集』)で、「古より、獨人、寡婦、通臣、才子狂生、遺臣逸士」が「心情を抒写した」ものは、「いまだ巻を終えずして悲しみ來たり、涕先ず臆を霑す」ゆえんの「やむを得ざるもの」三をあげ、「南社之作得母類歟。然而語長心重、本非無疾以呻吟。興往情來、畢竟傷時而涕泣。寥寥車轍、不同幾復當年。落落襟懷、差比河汾諸老。弁足音于空谷一二聲然、追逃社于前盟、數人而已。」と述べたのは、またよく南社文學の向うところを明示したものと云えよう。劉光漢が「題陳去病梓汲樓詩集」の詩で、「松陵詩學有宗派、魯望雲林昔擅名。壇坫主盟誰繼起、漢槎哀怨極堂清。」(『國粹學報第七期』)と詠じ、陳去病また柳詒子を評して、「吾友柳棄疾、今夏存古也。篤好幾復遺著、網羅頗富。」(『國粹學報第三十二期』)と云い、柳詒子も、「復社雋流置酒高會、其意氣亦不可一世。迨乎兩京淪喪、閩粵經綏、其執干戈以衛社稷者、皆壇坫之雄也。事雖不成、義固昭於天壤。孰謂悲歌慷慨之流、無裨於人家國也。」(『微吾徒其誰與歸』)
高天梅も「復社風流証鳳盟、君去龍蛇傷亂世。」(『以詩先施和此為敬』)とか、「風痺杜哭陳同甫、禾黍深悲屈大均。」(『同上』)など詠じ、龐樹柏も「張楊風采渺然。」(『於虎溪張公祠到者十七人』)とうたっている。黄

節また鄭所南・屈翁山・顧亭林的詩を愛し、蘇曼殊も「嶺海幽光録」(『曼殊大師全集』)において、屈翁山の詩詞を引用しつつ、明末亡國の際、難に殉じ節に生きた男女十七名の事跡を記している。

これらによって、南社が幾社復社驚隱詩社などの後を追うものであり、祖國への熱愛や亡國の痛恨に満ちた先人の作品を、いかに愛誦したかを知ることができる。同時に、彼等が「發明國學」「保存國粹」を強調したとは言っても、重点的に取り上げたのは、いわゆる「文字の獄」によって埋もれていた、宋末明清の烈士遺民の禁書焚書を世に出すことであり、その遺風を顯彰することによって、民族思想を鼓吹し、民族感情を喚起しようと努めたのであり、真の目的はいわゆる「排滿興漢」に在ったと言うこともできよう。

さて「力を竭して歐洲の精神思想を輸入して、詩料に供せん」(梁超、夏威)とし、「能く旧風格に新意境を含ませしめて、ここに革命の實を挙げることが出来る。」(梁超、飲)と考え、「わが國人の新學に志ある者、なんぞまた日本文を學ばざるか。」と「大声疾呼して同志に告げた。」(梁超、東洋月旦)梁超超たちの欧化的革新的な「詩界革命」に対して、以上のような國粹的復古的な思想の持主であつた南社の同人たちはもちろん反対であつた。かつ、梁超超や黄遵憲が保皇党であつたことが、革命的な立場に在った彼等の「詩界革命」に反対する一つの、しかも重要な理由でもあつた。

高天梅は「可憐亡國產文妖」(『集感懷詩』)と嘆じ、林万里は、「近人猶復盛持文界革命詩界革命之說、下走以為此亦季世一種妖孽、関于世道人心靡淺也。」(『高天梅、顧無』)と論じた。特に詩界革命論者やその主流の詩人たちが、好んで外國語の翻譯語や日本製の漢語などをむやみに使用する風潮に対しては、殊に反対であつた。黄節が、「今日黃冠草屨、空山歌哭、語吾國語、文吾國文、哀声悲吟、冀感發吾同族者、僅僅見也。」(『國粹學報第一期』)と嘆き、「國粹學報略例」(出)で「其文純用

國文風格、務求淵懿精爽、一洗近日東瀛文体粗淺之惡習。」と述べていることに明瞭に示されている。林万里が、「顧自棄國粹、而規倣文辭最簡單之東籀單詞片語、奉若邱索。此真可異者矣。」（顧無忌書）と論じ、高天梅もそれに「わが心を得たり」と同意している。沈礪が「古道万難争末俗、新声一派競俳偶。」（南社詩錄、顧道）と詠じたのも、同様の感懷を吐露したものである。

しかし、半面彼等が、濃淡の差はあるにしても、「詩界革命」の影響を受けたことも否定できない事実である。

柳詠子はその時を回顧して、「十六歳の年になって、梁啓超の新民叢報内の飲冰室詩話、詩界潮音集を読んで、詩學革命に熱心になり、以前作ったものを一炬に付した。」とか、「梁啓超と龔自珍とは、当時におけるわが脳中兩尊の偶像であるといえよう。國民報が排滿を提唱し、保皇に反対し、大陸報また康梁の私德を攻訐してから、わたしの信仰心もしだいに動揺した。十七歳に上海愛國學社で讀書し、章太炎・鄒威丹を識り、これより梁氏に反対した。しかし彼の詩は今に至るもなお幾句喜ぶものがある。」（創作の経緯、我對於柳）と述べているが、たしかに彼の作品には、比較的後のものにも、梁啓超の影響を遺留している。

國粹的復古的であつた同人の多くは、當時の旧派の詩人たちを許容するという態度——いや同調者もいた——であつた。そのことは、「國粹學報」上に王闓運・鄭孝胥・陳三立などの作品を収録している一事をもつても明らかである。しかし柳詠子は、当時旧詩壇を支配していた王闓運たち魏晉派、鄭孝胥・陳三立たち江西詩派、樊增祥・易順鼎たちの中晚唐派に対して、「すべて反対を表示し、別に一宗を創めたいと考え、明末の陳子龍・夏存古から、上は唐風を追つた。」（同上）もとより多大の成功を収めることができず失敗に終わったが、彼にも詩界改革に関する一つの企圖があつたことは、同人たちと異なるところである。

二

高天梅は「新民叢報」の「詩界潮音集」にその詩作を発表したこともあり、「世界日新、文界詩界、当造出一新天地、此一定公例也。黃公度詩、獨闢異境、不愧中國詩界之哥倫布矣。近世洵無第二人。然新意境新理想新感情的詩詞、終不若守國粹的用陳旧語句、為愈有味也。」と言ひ、「今之作者有二弊。其一病在背古、其一病在泥古。要之二者、均無當也。苟能深得古人之意境神髓、雖以至新之詞采點綴之、亦不為背古。謂之真能復古可也。故詩界革命者、乃復古之美稱。」（顧無忌書）と論じている。すなわち高天梅は、時代の進歩に伴ひ詩界もまた新天地を開拓すべきことを当然と認め、黃遵憲に対しては梁啓超の批評（飲冰室）をそのまま是認し、「近世まことに第二人無し」と讃辭を惜しまなかつた。だが、國粹的復古的な立場を離れていないことも明らかである。彼は「古人の意境神髓を得る」ことこそ、真の復古であると考え、「己の本色、己の氣概がなければ偽詩人にすぎない。」（同上）ことを強調し、古人の糟粕をなめる極端な復古に反対し、李滄溟・李空同の復古の如きは「詩道の大厄なり」と極論している。

更に、「如鼓吹人權、排斥專制、喚起人民獨立思想、增進人民種族觀念、皆所謂止乎禮儀、而未嘗過也。」（同上）と述べ、新思想新感情をうたうことが、決して伝統的な詩道に背くものでないことを論じている。彼の詩には、たしかにこうした傾向が顯著であり、單なる弔古傷今的なものではなく、當時の貪官汚吏の腐敗墮落、政治の貧困、人民の苦痛を詠じたもの、人權女權を強調したものなどがある。また、梁啓超などの影響も看出される。例えば、「詩中八賢歌」後詩中八賢歌の如きは、梁啓超の「広詩中八賢歌」（新民叢報）を模倣したものと考えられる。

次に蘇曼殊は、友人陳独秀や章太炎などに作詩を學び、（曼殊大師記於蘇曼殊的談話）一九〇四年には保皇黨の首魁康有為を暗殺せんと決心

し、友人陳少白に阻止せられるということさえあった（曼殊大師全集、曼殊大師年譜）が、「譚嗣同墓前一閣文、奇峭幽潔、古意而章、有絃外音。」（莊子齋）と、譚嗣同の作品を賞讃したこともあり、必ずしも「詩界革命」には反対でなかった。

殊に「衲嘗謂拜輪足以貫雲均大白、師梨足以合義山長吉、而沙士比彌爾頓田尼孫、以及美之郎弗勞諸子、与祇杜甫爭高下。此其所以為國家詩人、非所謂於靈界詩翁也、近世學人、均以為泰西文學精華、尽集林叢二氏故紙堆中。嗟夫、何吾國文風不競之甚也。」と論じ、更に「前見辜氏擬漢騎馬歌、可謂辭氣相副。」と辜鴻銘の訳詩を推賞し、「惜夫、辜氏志不在文字、而為宗室詩匠牢其根性。」と嘆き、（曼殊大師全集、致高太師書）「秋風海上已黃昏、獨向遺編弔拜倫、詞客飄蓬君与我、可能異域為招魂。」（同上、詩集）「丹頓拜倫是我師、才如江海命如絲、朱絃休為佳人絕、孤憤酸情欲語誰。」（同上、本事詩）などと詠じておることによっても、西洋詩歌から滋養分を吸収し、殊に Byron に学ぶところが大きく、西洋文学を解せざる「靈界の詩翁」や「宗室詩匠」に対しては、ともに語るに足らないと考えていたことがわかる。郁達夫が「彼の詩は定庵より出で、その上に一脈清新な近代味を加えたものである。」（曼殊大師全集、附錄）と評し、郭沫若も「蘇曼殊の詩ははなはだ清新。」（曼殊大師全集、附錄）と語ったが、その清新な近代味は、西洋詩歌に負うところが多大であったと言ふべきであらう。

馬君武は既に述べたように国学保存会の会員でもあり、孫文に従って革命運動にも従事したのであるが、「新民叢報」や「新小説」などにその詩文を発表し、梁啓超が「飲冰室詩話」の中で、しばしば彼に言及していることによっても、梁啓超たちとも親しい関係にあったことがわかる。

彼は「十九世紀二大文豪」（新民叢報第二十八號、歐學之片影）において、「非荷特 Goethe、非許累爾 Schiller、非田尼孫 Tennyson、非卜黎爾 Carlyle、

十九世紀之大文豪亦多矣、其能使人戀愛、使人崇拜者、何以故。因彼數子之位格之價值、止於為文豪故。至於雨荷 Victor Hugo 及擺倫 Byron 則不然、雨荷（一作曼俄）法蘭西之大文豪也。而實愛自由之名士也。國事犯也、共和党也。擺倫者、英倫之大文豪也。而實大軍人也。大俠士也、哲學者也、慷慨家也。若二子者、使人戀愛、使人追慕、使人太息。」と讚嘆しているが、彼もまた Byron を始めとして、多くの西洋詩人の影響を受けた者であり、彼が西洋詩歌を撰取した態度は、この一文によってもうかがうことができる。

後年「馬君武詩稿」に序して、「此寥寥短篇、無文學界存在之價值。惟十年前、君武於鼓吹新學思潮、標榜愛國主義、固有微力焉。」と回顧したが、たしかに彼の詩は、革命思想を鼓吹し、新學思潮を推進する上において、当時少なからざる影響を及ぼしたものである。高天梅が特に「清新詩句題上頭」（宋濟庵詩集、後詩中八賢歌）と詠じたゆえんも、彼に西洋文化との深い接觸あつたがためと見るべきであらう。

後年「打孔家店的英雄」（胡適、與）をもつて有名となった呉虞も、「不佞丙午遊東京、曾有數詩（題為中夜不寢偶成、載飲冰室詩話。）注中多『非儒』之說。歸蜀後、常以六經、五禮通考、唐律疏義、滿清律例、及諸史中『議禮』『議獄』之文、与老莊、孟德斯鳩、甄克思、穆勒約翰、斯賓塞爾、遠藤隆吉、久保天隨諸家之著作、及歐美各國憲法、民、刑法、比較對勘。十年以來、粗有所見。拙撰辛亥雜詩、（見甲寅七期。）李卓吾列伝、（見進步九卷三四期。）略有發揮。」（章行嚴會語）張重民曰、「辛亥雜詩中『非儒』諸詩、思想之超、非東南名士所及。」不佞極其言。然同調至少。（吳虞文錄、家族制度為專制）と追懐しているように、既に一九〇六年ごろから「非儒」的思想を抱き、それは南社同人中において異色のものであり、たしかに「同調至って少なかった」のは事實である。南社文学の一隅に、文学革命時代の芽が現れていたとも言えよう。

更に、「大胆詩人」と称せられた林庚白は「早慧逸才、十幾歳にして国事に奔走し、」(近代詩録二四)「見女風懷階級感、憐渠四海有呻吟。」(石遺室詩話)「(革命家詩)とか、「來往心頭貧富感、不平物候未快書。」(同上、蘇曼殊)などと詠じ、柳詒子も言った如く、「彼は一個の客庁社会主義者に過ぎないが、旧詩人の中で客庁社会主義者を探すことも、すでに容易な事ではないであろう。」(創作経緯、我對於柳) 鄭子瑜は、彼こそ「真に『旧瓶装新酒』の実行家であり、彼の『往來長笛汽車声』の如きは、多くの人に伝誦されたものだ。」(魯迅詩話)と述べているが、彼もまた南社詩人中の特異な存在であり、旧形式に新思想を盛った「詩界革命」の実践者であった。

三

一九〇二年ごろから一九〇九年ごろにかけての日本、殊に東京は、梁啓超・孫文・黄興・宋教仁・章太炎等、いわゆる亡命家を中心とし、年とともに激増した留学生たちによって、中国革命の震源地的様相を呈していた。同時に新思想新文化の吸盤的役割りを果していた「留学生界には外国書の翻譯が非常に流行し、少しでも文理に通ずる者は競うて翻譯に従事していた。」(魯迅詩話、馬君武の譯詩) 潮の中で、いち早く外国の詩歌を翻譯し、中国詩壇に清新の氣を注入したのが、前述の馬君武と蘇曼殊であった。

もとより、彼等より以前に西洋詩歌を翻譯した人はあった。すなわち、王韜が「普法戦紀」の中でドイツ、フランスの国歌を訳し、辜鴻銘が「癡漢騎馬歌」を訳し、——胡適は、「その実」辜鴻銘の学生であった「姚康侯とその幾人かの同門が改修潤色したものである。」(四十)と言っている。——梁啓超も「新中国未來記」の中で、Byronの「渣阿亞」(Giaour)の詩、「端志安」(Don Juan)の一節を訳したことがある。

しかし、王韜に「外国詩歌を紹介しようという考えがなかった」こ

とは陳子展の言った通りであり、(中国近代文学史) 辜鴻銘の「志が文学になかった」ことも蘇曼殊の言の如くである。(既出、致) ただ梁啓超は彼等と異なり、「著者不以詩名、顧常好言詩界革命。謂必取泰西文豪之意境之風格、鎔鑄之以入我詩、然後可為此道開一新天地。謂取索

士比匪兒頑攪倫諸傑構、以曲本体裁識之、非難也。吁、此願偉矣。」(新中国記)と、西洋文豪の意境風格を取り、これを鎔鑄して作品の中に入れることによってのみ、「詩界革命」のために新天地を開き得ることを確言し、西洋詩歌訳出の必要性を強調し、「惟以不失其精神為第一義」と主張した。なお、Byronの詩について、「これはギリシヤ人を激励するために作ったものであるが、われわれが今日聴くと、かえって幾分は中国のために言っているようだ。」(同上)とも述べている。

この梁啓超の「偉大な念願」を一応実現し、詩界に貢獻したのが、馬君武と蘇曼殊であったとも言えよう。

錢基博は「歐詩之訳、自玄瑛始。」(現代中国文)と言っているが、馬君武が訳詩を発表したのは一九〇二年ごろからであり、蘇曼殊がByronの詩を訳したのは一九〇六年ごろであったから、馬君武の方がやや早かったと言ふべきである。

馬君武の訳詩は「馬君武詩稿」の中に、Byronの「哀希臘歌」十六首、Goetheの「阿明臨海岸哭女詩」八首、「米麗客」三首、Thomas Hoodの「継衣歌」十一首、計三十八首が収められている。なお「新民叢報」に「フィリピン愛國者」黎沙兒(Rizal) (第七十一)や雨荷(Hugo) (第二十)の詩を載せている。

蘇曼殊の訳詩には、Byronの「留別雅典女郎」「贊大海」「去國行」「哀希臘」「答美人贈東髮黛帶詩示彈琴人」「星耶峯耶俱無生」(詩選) Burnsの「頌頌赤牆」 Howittの「去燕」 Shelleyの「冬日」 Goetheの「題沙恭達羅詩」 印度の女詩人 Toru Dutt の「樂園」(泰西名) (人詩選) などがある。

蘇曼殊は「拜輪詩選」の自序において、「善哉、拜輪以詩人去國之憂、寄之吟詠、謀人家國、功成不居、雖与日月爭光、可也。嘗謂詩歌之美、在乎氣味。然其情幻渺、抑亦十方同感、如納旧韻、頗類赤牘、靡去燕冬日答美人贈束髮、帶詩教章、可為証已。」「今訳是篇、按文切理、語無增飾、陳義悱惻、事辭相稱。」「と述べて、「潮音自序」の中で、「Both Shelley and Byron's works are worth studying by every lover of learning, for enjoyment of poetic beauty, and to appreciate the lofty ideals of Love and Liberty.」と記している。これらと前にあげた「与高天梅書」や、馬君武の「十九世紀二大文豪」などによって、彼等がこれらの詩を訳出し、國人に贈らんと欲したゆえん、訳詩態度などをうかがい知ることができる。そして、ともに愛國的革命的であり、自由を熱愛する者ではあったが、蘇曼殊の方がより浪漫的であり、より文学的であったことも知ることができよう。

彼等の訳詩そのものについて、胡適は、「頗嫌君武失之訛、而曼殊失之晦。訛則失真、晦則不達、均非善訳者也。」（『嘗試集附錄（去國）』と評し、李思純は、「馬式過重漢文格律、而輕視歐文辭義。」（『蘇式訳詩、格律較疏、則原作之辭義皆達、五七成体、則漢詩之形貌不失。』）（『學衡』第四期）と蘇曼殊式の訳詩を最良のものと推賞した。陳子展は馬君武の訳について、「具有一種深摯感人的力量、想來總不致於辜負了原作者。」（『中國近代文學史』）と讃え、錢基博は蘇曼殊の訳詩に対して、「晦而不婉、啞而不亮、衡其氣味、以傷原格。其訳拜輪星耶峯耶俱無生一章、則幾不成語矣。」（『現代中國文學史』）と難じ、文公直は「極忠實貼切、真能完成其按文切理、語無增飾、陳義悱惻、事辭相稱之使命。」「一經与原文対読、即見其詞氣淒泊、絶不增減、且有雅麗遠勝原作者。務求切合、絶不牽強、精審直訳之精神、与乎必使事情無乖、思想恰當、意訳之神妙、尤可為繙訳界放一異彩。」「曼殊之訳筆、洵足以為師法。」と称揚している。

もともと馬君武は七言五言の古詩体をもって、蘇曼殊は五言七言四言の古詩体をもって訳したのであり、殊に蘇曼殊は「章太炎の影響を受け」て、「多く常人の識らない古字を用いた」（『曼殊大師全集、文公直、曼殊大師之壯年時』）のだから、魯迅も言ったように「古奥」であり、「古詩のようである」（『魯迅全集、第1巻、雜憶』）ことは当然である。「訛晦」であることも免れず、「原作にそむかならぬもの」とまでは言えないが、「人を感じしめる力を具有して」いるものとは言えよう。錢基博の論は過酷であり、文公直の言は過譽に失っている。

しかし、訳詩の困難さ、伝統的詩形の制約を考える時、当時においてこの訳業を成したことは高く評価さるべきであり、彼等が質的にも量的にも訳詩界の先駆者として、世界的浪漫詩潮の本格的な最初の輸入者として、中国詩壇に貢献するところが大きかったことは認めなければならぬ。しかも、彼等が Byron, Goethe, Hood, Shelley など浪漫詩人の作品を愛読し、翻譯したということは、彼等の個人的な嗜好にのみ因るものではなく、辛亥革命前夜における、当時の革新的な青年たちの思想感情を反映したものであった。

結 語

以上によって、南社の同人たちが「詩界革命」に対していかなる態度を執ったか、詩歌革新の上になかなる貢献をなしたか、ということについて一応明らかにできたかと思うのである。

すなわち、南社の同人たちの中には、同じく革命的であったと言っても、狭い民族主義——種族革命——の立場に立ち、國粹的復古的であって、漢民族の光榮ある過去により多く眼が向けられていた人々があった。彼等は黄節も「予尤滋愧泰西學術万策、予未之觀。」（『國粹學報』）と反省しているように、西洋文化に対する理解に乏しく、外国思想輸入のもたらす害毒を排撃するに急であつた。したがって、新思想を内容とし、新名新詞を使用する「詩界革命」に反対であり、殊に

日本語を模倣する風潮には極めて反対であった。しかし、無意識的に「詩界革命」の影響を受けたことも否めない。黄節・陳去病・諸宗元・吳梅・胡樸安・柳重子などがそれである。ただ柳重子は、梁啓超たちの影響を受けること深く、かつ旧派の詩人たちに反対であったという点において異なるところがある。この人々は辛亥革命以後、多くは古典研究に没頭し、それはそれとして見るべき業績を収めたのであるが、現代文学から言えば、学衡派の詩人たちに影響を持ち、また吳梅のように、新詩人に「詞曲から新詩へ」の道を示した程度に止まったのである。

一方、同じく「清朝打倒」を叫んだが、民主革命の思想の抱懷者であり、世界的革新的であって、過去よりは未来へ、近代国家の建設を理想とし、新しい社会の実現に熱情を傾けた同人たちがいた。馬君武・蘇曼殊・吳虞・林庚白などがそれであり、高天梅の如きもこれに属せしめることができよう。彼等の多くは外国に留学あるいは居住したことがあり、外国文化に対する認識も比較的深く、新思想の熱心な吸収者であった。したがって、積極的消極的の差はあるにしても、實質的に「詩界革命」の道を推進したのである。殊に馬君武・蘇曼殊たちは西洋詩歌を翻譯し、中国詩壇に新奇な空氣を導入した。それは林琴南の翻譯小説ほど影響が大きかったとは言いが、詩歌革新の上に寄与するところが大きく、現代詩生誕の一つの動力となったとも言

木門の唐明詩鼓吹論

一 詩壇に於ける木門の活躍

元禄・宝永・正徳・享保の詩文壇に於ける木門の活躍は目覚まし

えよう。

かつて魯迅は「革命を希望する文人が、革命一たび到るや、かえって沈黙して行った例」として南社をあげ、「民国成立以後、倒寂然無声了。」^(一)と言ひ、「我想、這是因為他們的理想、是在革命以後、『重見漢官威儀』、峨冠博帶。而事實並不這樣、所以反而索然無味、不想執筆了。」^(二)（三閑集、現今的）と講じたが、南社同人の中、前者に対してはこう評することができても、後者に対してこの論は当たらないであろう。馬君武が「赫克爾一元哲學」を、蘇曼殊が「碎簪記」を、吳虞が「家族制度為專制之根柢論」など多くの論文を、「新青年」に發表したところによつても、すべてが「寂然無声」となつたとは言えないであらう。

なお、この魯迅の講演は、当時創造社の同人たちが盛んに提唱してゐた、「革命文学」に対する批判を中心としてなされたものであり、学衡派の詩人吳芳吉も、「激刺之文学、在前清末葉、固已有人行之。其成功為滿清一姓之推轂、而其罪惡則在全国人心之迷乱。」^(三)（遺書、卷二十、雜稿二、再論書）と論じてゐる。論旨もとより異なるけれども、創造社の前車的存在として南社を考えたことは相似てゐる。今、これらの論の当否を問題としてゐるのではなく、そこにも南社文学と現代文学との一つの連関が考えられる、ということを一言して置きたいのである。

(一九五五、一、一二)

松下 忠

い。蘆社の服部南郭は、「錦里先生、実為文運嚆矢。」^(四)（先哲叢談卷）と認め、友野霞舟は「延至元禄享保、作者林立。就中木門蘆社之徒最